

昭和五十七年度

資料調査報告書 第十集

— 武道関係資料 —

鳥取県立博物館

序にかえて

資料調査報告書も第十集を刊行することとなった。今回の調査報告書は、当館開館以来十年間に収集した各家文書、ならびに複製本による収集資料の中から、武道関係資料（槍・劍・居合・柔・体術）のみを調査した結果である。いかなる文書も、個人の所有にかゝるものを発掘していくのは容易なことではない。当時発行されたであろう伝書の種類からすれば、こゝに収録したものはその全貌の一端をうかがうにすぎないが、幸にして寄託を含めて鳥取藩に伝わる一応の流派は不十分ながら網羅することができた。

本報告書作製のさ中、初代鳥取市長岡崎平内の御子孫岡崎豊子氏より武道伝書を含む三百点に近い文書の寄贈を受けた。県外にあつて郷土に寄せられた同氏の御好意に心より感謝する次第である。

岡崎平内は鳥取藩剣術の主流をなす雖井蛙流の道統を受けついで人である。はからずもこの伝書類がこの調査報告書に精彩をくわえてくれたことは望外のよろこびである。

本報告書が今後武芸史研究の一助になれば幸である。

昭和五十八年三月

鳥取県立博物館長

山根幸恵

目次

序にかえて	1
鳥取藩の武道	2
鳥取藩武道の主なる流派	5
槍術	9
劍術	11
居合	17
柔	19
体術	20
資料の所属について	21
あとがき	21

鳥取藩の武道

近世大名家資料やその家臣団の資料の中にしばしば武術・兵学の資料がみられる。しかし、一般にはこれ等の資料にあまり注意がはらわれていないといえる。

兵農分離によって構成された近世大名の家臣団は組織的な軍事力である。とはいえず、近世に入って、武士が実戦から離れ生活様式が形式化するにいたった「弓馬之道」といわれたものが「武士道」として觀念化して行く。幕府は「文武弓馬之道・専可相嗜事」（武家諸法度）と武術を奨励する。「治に居て乱を忘れず」ということが強調される。

いうまでもなく大名家臣団の基本的性格は、組織的軍団であり、知行制・軍役負担の体系化によってそれを維持することになる。
ところで軍団の戦力は、兵員数と兵器によるが、それを使う兵法と術の高度化によるといえよう。武術の奨励は戦力の高度化をねらったものであったといえる。しかし、先に述べたように、実戦を離れた武士は生活様式の形式化により、武術の鍛錬は戦闘力・戦闘技術の錬磨（実戦兵法）から形式化し觀念化し精神的要素も加わって武道として独自の発展をとげ全盛期を迎えたといえよう。

鳥取藩でも幕府にならって武術を奨励するが、宝暦以前についてはその具体的な方法は明らかでない。宝暦六年（一七五六）、藩校尚徳館が創建されると、弓・馬・刀・槍の各師範家に、熱心な門弟を書き出させ、多くの門弟を養成した師範に褒美を与え、以後毎年十月にこれを實施した。また、時に感じ家中の武術稽古を藩主が親覽し、各師範に賞詞を与えて奨励した。
当時、鳥取藩内で、どのような武芸が行われていたかを知る史料に、「御園目付衆寛延二年被參候節、御両国之諸事御尋并御答書抜」（享和三年亥十月写）がある。それによると、「芸能人之事。別報申上候。右帳左ニ記」として、「武芸師範」を次のように列記している。

- 一 一学流棒手
- 一 一学流取伝繩
- 一 居合安心流
- 一 平法難井蛙流
- 一 平法難井蛙流
- 一 弓日置流
- 一 日置流道雪派射道
- 一 井蛙流劔術
- 一 安心流居合
- 一 一学流棒
- 一 一学流捕伝繩
- 一 一伝流繩
- 一 水中浮沓
- 一 日置流弓術
- 一 甲州流軍法
- 一 喜兵衛術
- 一 武宮流鉄炮火筒
- 一 同小筒
- 一 同種ヶ嶋
- 一 葉調合
- 一 棒火矢
- 一 一切火業
- 一 一貫流射術居
- 一 一家次流居合
- 一 北條流軍法
- 一 竹林派弓
- 一 日置流弓
- 一 道雪流弓
- 一 吉田流弓
- 一 水野流居合
- 一 日置流弓
- 一 新陰正田流
- 一 大坪流馬
- 一 同
- 一 井蛙流平法
- 一 桑嶋流馬医術
- 一 同
- 一 橋本流同断
- 一 根津流居者
- 一 同流居合
- 一 岩流劔術
- 一 撰津守家来
- 一 武蔵岡明流劔術
- 一 撰津守家来
- 一 日置流弓
- 一 中村流弓
- 一 撰津守家来
- 一 澤流鎗
- 一 化頭流居合
- 一 撰津守家来
- 一 東軍流劔術
- 一 撰津守家来
- 一 居者
- 一 撰津守家来
- 一 軍和漢軍理流
- 一 鎗正田流
- 一 撰津守家来
- 一 荒尾近江家来
- 一 荒尾近江家来
- 一 馬淵流
- 一 荒尾近江家来
- 一 旧田儀助
- 一 木戸分次郎
- 一 山田庄蔵
- 一 中山孫右衛門
- 一 安場勘左衛門
- 一 大森久左衛門
- 一 中嶋七兵衛
- 一 尾崎七兵衛
- 一 尾崎仲左衛門
- 一 澤卓右衛門
- 一 松井宗左衛門
- 一 澤半太夫
- 一 大塩恵次郎
- 一 福間源左衛門
- 一 岡山源吾
- 一 撰津守家来
- 一 馬淵甚平
- 一 旧田儀助

武芸師範

- 一 岩流兵法
- 一 津田長門
- 一 弓日置流
- 一 馬大坪流
- 一 軍馬常心流
- 一 鎗并鎖棒宝山流
- 一 天野圖書
- 一 居合劔術弥和羅水の流
- 一 軍法甲州流
- 一 軍法山本流
- 一 武器古実安倍流
- 一 岩流劔術
- 一 飛騨親
- 一 香河弥右衛門
- 一 弓日置流
- 一 雪可流
- 一 土佐親
- 一 箕浦七郎
- 一 軍術甲州流
- 一 道雪流
- 一 兵衛井蛙流
- 一 居合劔術弥和羅水野流
- 一 箕浦土佐
- 一 組射竹内流
- 一 箕浦土佐
- 一 鎗宝山流
- 一 軍術甲州流
- 一 東軍流劔術
- 一 水流居合劔術
- 一 正田流鎗
- 一 松井番右衛門
- 一 家業三付師範之義改不申上山
- 一 高坂武兵衛
- 一 武宮嘉兵衛
- 一 同
- 一 水野流居合
- 一 衛士梓
- 一 築田彦四郎
- 一 一家次居合
- 一 七左衛門梓
- 一 藤井五郎兵衛
- 一 一伝流繩
- 一 小笠原家集
- 一 甲州流軍器法
- 一 板倉左仲
- 一 日置流弓
- 一 泉州流軍記法
- 一 一伝流繩
- 一 鉄炮小筒稲留流
- 一 佐久間甚左衛門
- 一 落合四郎左衛門
- 一 香河喜六
- 一 平尾甚右衛門
- 一 野間源太左衛門
- 一 佐藤権左衛門
- 一 甲州流軍術
- 一 佐藤権左衛門
- 一 家次流居合
- 一 竹村半兵衛
- 一 岩流劔術
- 一 小川市太夫
- 一 正田流鎗
- 一 八田作右衛門
- 一 井蛙流劔術
- 一 青木源三郎
- 一 今枝流劔実利方
- 一 不破平内
- 一 日置流弓
- 一 南條勘兵衛
- 一 甲州流軍法
- 一 安田七左衛門
- 一 石堂竹林流弓
- 一 野間真之右衛門
- 一 雪荷派射術
- 一 井蛙流劔術
- 一 衣笠市郎次

- 一 馬大坪流
- 一 荒尾近江家来
- 一 石尾四郎左衛門
- 一 劔術去水流
- 一 荒尾近江家来
- 一 岡村伝内
- 一 劔道今枝利方立合
- 一 兵法真心流
- 一 荒尾志摩家来
- 一 平井伊膳
- 一 我身流劔術
- 一 荒尾志摩家来
- 一 安宅五百記
- 一 安術流組討
- 一 稲留流小筒
- 一 同流薬法
- 一 津田周防家来
- 一 鶴岡左
- 一 長谷川流異風抱膝臺
- 一 但し六匁玉之筒拾五間より百
- 一 目玉二筒式拾壹丁迄
- 一 同流薬法
- 一 甲州流小幡の伝兵学
- 一 妙流鎗術
- 一 津田周防家来
- 一 小幡唯七
- 一 竹内流劔術
- 一 弓術日置流中村流
- 一 劔術今枝流真心流
- 一 浪人
- 一 田中權之左衛門
- 一 半弓大和流
- 一 浪人
- 一 岡本柳翁
- 一 田明武蔵流平法
- 一 浪人
- 一 竹内三順
- 一 平法竹内流
- 一 浪人
- 一 宮内芳節
- 一 馬術
- 一 浪人
- 一 腰廻り捕手竹内流
- 一 浪人
- 一 牧田小郎次
- 一 棒術繩術
- 一 鎗堤宝山流
- 一 浪人
- 一 永嶋平兵衛
- 一 平法坂田流
- 一 種ヶ嶋撃前岡流
- 一 浪人
- 一 小谷金次
- 一 煉り筒仕立法并乱矢火撃法
- 一 陣小屋目覚し秘伝枕
- 一 軍場松明薬屋不厭
- 一 弓日置流
- 一 劔術雲弘流
- 一 拳手大杉
- 一 榎関伝流
- 一 鉄炮小筒稲田流
- 一 榎田郁
- 一 米子組
- 一 中村流弓
- 一 日下部利兵衛
- 一 大坪流馬
- 一 同人
- 一 無極流鎗并長刀
- 一 雲孤知新流兵法
- 一 山本嘉兵衛
- 一 日置流弓
- 一 富田流兵法
- 一 安見喜兵衛
- 一 一槍流鎗
- 一 前田平九郎
- 一 日置流弓
- 一 杉山儀右衛門
- 一 一家次流居合
- 一 同人
- 一 一槍流鎗
- 一 栗木八右衛門

倉吉組

- 一 甲州流軍理 荒尾五郎右衛門
- 一 道雪流弓 荒尾五郎右衛門
- 一 甲州流軍理 荒尾五郎右衛門
- 一 道雪流弓 荒尾五郎右衛門
- 一 甲州流軍理 荒尾五郎右衛門
- 一 道雪流弓 荒尾五郎右衛門
- 一 甲州流軍理 荒尾五郎右衛門
- 一 道雪流弓 荒尾五郎右衛門
- 一 甲州流軍理 荒尾五郎右衛門
- 一 道雪流弓 荒尾五郎右衛門

これによると、江戸時代中期の寛延二年(一七四九)ごろには、弓・馬・劍の師範家があげられている。門人の数は明らかでないが、藩内の武芸の盛況をうかがわせる。

嘉永六年(一八五三)学制改革により学館が拡張され館内に講武場(武場)が設けられた。各師範家は定められた稽古日に門弟をつれて館内武場で修業をすることにいったが、稽古道具も備えて貸出するなど藩も積極的な奨励策をとった。

先代の寛延二年の史料以外に藩内の武芸の状況を明らかにするものとして西山則休の『本藩武芸伝統録』弘化四年(一八四七)がある。その後、明治末年から大正期にかけて編纂された『鳥取藩史』のため鈴木源太郎が執筆した『鳥取藩武芸史』がある。その後、この方面の研究はすすんでいないが、ただ、劍道を中心とした山根幸恵の研究があるのみである。山根の『因伯劍道史考』(昭和三十六年刊、鳥取郷土選書第八集・久松文庫)は『鳥取藩史』(軍制志)以外では唯一の研究書であった。しかし、山根はその後の史料収集・研究の成果をふまえて、これを増補改訂し、『鳥取藩劍道史』(昭和五十六年九月、

深水社)として刊行した。山根の研究によると、鳥取藩の劍道の発達は、次のような四期に大別されるという。

- 一期 寛永九年—慶安四年
- 二期 承応元年—宝曆六年
- 三期 宝曆七年—嘉永三年
- 四期 嘉永四年—明治四年

第一期は、まだ戦国の余風が残り、戦場往來の古豪者も多く、臼井本寛、羽生郷右衛門などが知られているが、彼らは戦場往來のうちに武術を体得した人々であった。猪多伊折佐重良は、疋田文五郎に学び、鳥取藩に新陰流を伝えたとはいえよう。

第二期は、鳥取藩武芸史にとって特筆すべき時期である。鳥取藩に伝わった劍術諸流は、二〇数流派にのぼるといわれるが、それらのうち、雖井蛙流・兎山流・神刀兎山流・理方得心流・一貫流・神風流は、鳥取の人によって工夫創始されたものであり、その多くが第二期から三期にかけて成立している。中でも、鳥取藩劍道の主流をなすのが深尾角馬重義によって始められた「雖井蛙流平法」である。

三期は、学館に武場が設けられ、藩の積極的奨励もあって盛んになった時期であり、また稽古用具の一層の工夫もあって、安定期に入り、さらに雖井蛙流から分派した兎山流、さらに神力兎山流・理方得心流・一貫流などの流派が創始された時期でもある。

四期は、幕末維新期で、欧米列強の来航もあり、武備の充実がさげられ、さらに一層武芸が奨励された時期である。この期にも民間奨励六によって神風流が創始されるとともに、江戸の劍道が入ってくる時期でもあった。中でも千葉定吉を劍道師範に召喚し北辰一刀流が藩内に入ってきたことは、劍道史とともに鳥取藩幕末政治史にも大きな影響を与えることになった。

このような、劍道史上にあらわれた諸流派については項をあらためてのべるが、いずれにしても、伝書・兵法書等武芸関係史料の収集調査をつづけ、さらにこれを研究することは、単に武芸史・武術史というだけでなく、近世武家文化史・武士道史という精神史への重要な手がかりとなる史料であると考えられる。

今回、充分な整理とはいえないが、当館の所蔵および収集した武芸関係資料について報告する。

鳥取藩武道の主な流派

鳥取藩内に行なわれた劍術の主な流派について。
先にのべたように、寛延期に藩内で行われた武芸は、刀・槍・弓・馬から砲・細・棒・水術まで各種におよび、その師範家も八九人という多種多様な盛況であった。

中でも最も一般的であり、武士の必須の武芸は刀劍の術である。江戸時代の劍道流派は約六〇〇流にもおよぶといわれる。鳥取藩内で行われた流派も現在わかっているものだけでも二〇数流派にもなる。

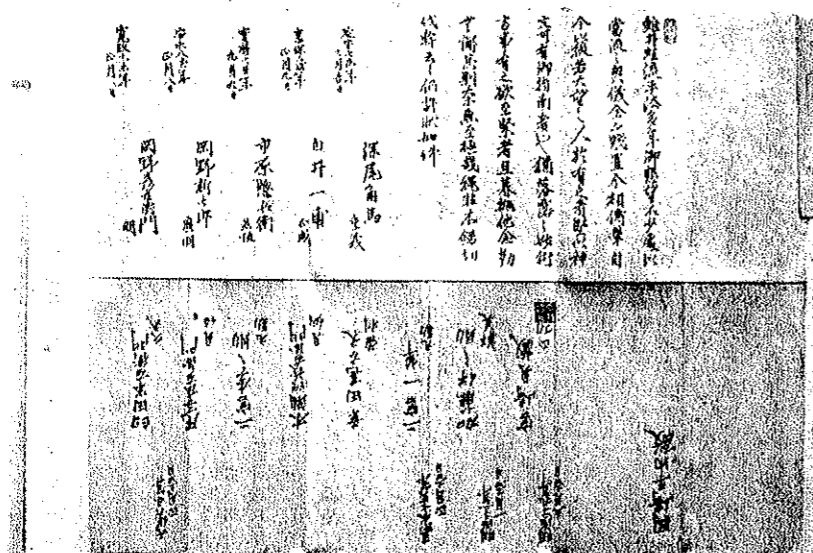
しかし、藩内で最もよく行われた流派は雖井蛙流であり兎山流であった。いずれも鳥取藩士により創始されたものであり、これ等を祖流としてさらに幾流かが生まれた。ここでは、これ等藩内で創始された流派を中心に藩内でよく行なわれた劍道諸流について、山根幸恵の研究成果によって簡単な解説を加えておく。

雖井蛙流(せいあ流)

正しくは「雖井蛙流平法」という。深尾角馬重義の創始した流派で、鳥取藩劍術の主流をなすものである。角馬は初め河田喜六と称し、三百石の馬廻役であった。家督相続の後、故あって姓を深尾と改めた。

角馬は、父河田理右衛門に丹石流を学び、のち去水流・東軍流・ト伝流・神道流・新陰流・タイ捨流・岩流・戸田流の諸流を修めた。丹石流は、太刀数も多く、かつ、甲冑をつけての戦場劍術で荒々しいものであった。角馬は自ら修めた諸流を考慮して、素肌の劍術に改め、自分の号「井蛙」をとって「雖井蛙流」と名付けた。「井の中の蛙といえども大海を知る」という意をこめ、さらに「平法」の二字を加えて、武士の日常に稽古すべき劍術であることを説いた。

雖井蛙流の特色は、「兵法」といわず「平法」といい武士の日常の心得を強調していること、さらに丹石流の戦場劍術から脱し、素肌の劍術とした。さらに稽古法に工夫を加えた。陣笠をかむって太刀撃の実感を体得させ、「手うち



の木刀（六角、三尺六寸か七寸）を考案して、剣を交えて相打ちになった時、相手の剣を制し、自らの剣が有効な斬撃となるための稽古を行なったことにあるという。

深尾角馬は、その娘の恋愛問題から知行地の百姓三人を斬殺した。そのため切腹を命じられて天和二年（一六八二）十月二十七日、五十二才で一生を終えた。

角馬から免許を与えられたものは十三人あったというが、現在ははっきりわかっていないのは、石河甚左衛門・石河四方左衛門正次・石河四方左衛門正直・白井有右衛門正成・白井源太夫正林の五人である。中でも石河正次と白井正林は達人で、この二人には雖井蛙流の免許とともに正次には化頭流、正林には安心流の居合の免許も授けた。雖井蛙流は正次・正林にうけつがれて行くが、正次の道統を石河派、正林の道統を白井派と称している。

化頭流（けげん流）

化頭流は、深尾角馬が安心流とともに創めた居合の流派である。本来は雖井蛙流に入れるべきものであるが、別派として、これを高弟の石河正次に伝えた。雖井蛙流石河派は途中で絶伝したが、化頭流の居合は、正次から大塩恵次郎包恵に伝えられ、包恵から大塩宇兵衛包武・國留助太夫弘孝・野間八左衛門義厚に伝えられたが、そのうち大塩包武の道統が吉田平馬知方に伝えられて幕末におよんだ。

安心流（あんじん流）

化頭流と同じく深尾角馬の創めた居合で、白井正林に伝えられ、雖井蛙流白井派とともに受けつがれて来た。石河派が早く絶伝したため、雖井蛙流といえど白井派ということになるが、同時に受けつがれているはずの安心流居合に関する資料は意外に少ない。正林の後は市原物兵衛・田淵征義に伝えられ田淵の系統が幕末まで伝えられた。

兎山流（ださん流）

鳥取藩士岡野六蔵正固の創めた流派である。

米子の荒尾成美について研究を深め、さらに神刀流を学び、両流を合せて自己の工夫を加えて一流をひらいたのが神刀兎山流である。

浅田は、四尺七・八寸の長い竹刀を遣い、遠間で立ち合い、敵を間合に入れないようにし、強いて相手が近づくと、相手の打って出ようとする先をとって撃突したという。

主計は安政六年十月学館小武場（藩校内の武士以下の演武場）頭取となり、さらに文久元年三月に「剣道師範役」となり、藩内の多くの士を取り立て、元治元年その功を認められて格式寄合組に進められている。その門からは松田道之唯武連・詫間樊六・秋田実・豊田謙蔵・浅田菅之丞・成瀬峰造・田中鉄馬等が出た。

神風流（しんふう流）

鳥取藩士詫間樊六（はろく）敬敷の創始した流派である。詫間家は慶長八年召出以来の家臣で、家祿二百石である。樊六は八代益蔵の長男、安政五年大姓に召出された。

樊六は、浅田主計について神刀兎山流を学び、のちに江戸に遊学し、斎藤弥九郎の練兵館で神道無念流を学んだ。堀正平著「大日本剣道史」によると「塾頭を務めた桂小五郎・井波唯一・太田市之進、なお同格の渡辺昇・詫間樊六等があった」とあり、樊六は練兵館屈指の使い手であったことがうかがえる。

帰国後、浅田の門を辞し、神戸大助について兎山流を学び、これ等に自己の工夫を加えて一派を創始し、神風流と称した。

文久三年八月十七日、京都本願寺の宿所で君側の重臣黒部権之助らが急進尊攘派に軒殺されたいわゆる「因幡二十士事件」（本願寺事件）が起った。樊六は二十士の一人で、一方の旗頭であった。二十士は京都藩邸・日野郡黒坂・鳥取と幽閉されていたが、慶応二年七月、長州軍に投ずべく脱走したが、途中の出雲国手結の浦で討手に襲われて斬死した。

神風流は二十士と行動をともにした橋津の豪農であり商人でもあった中原忠次郎や田中邦十郎に伝えられた。

岡野家は三百五十石の家臣で着座荒尾近江の組士であったため米子詰であった。正固は、明和三年（一七六六）雖井蛙流第四代師範新七郎広明の次男に生れ、父から雖井蛙流・安心流を学び、天明八年、十八才で免許を受けたという。その後も稽古を怠らず、苦心して一流を創始し兎山流と号した。

正固は、従来の流派が古法の形式の墨守を専らとし、形式に流れるのを排し、「専ら撃突酣戦、一日或は千余合を試みた」といわれるから、形の稽古を廃して防具をつけて撃刺稽古を主としたものであろう。兎山流で形を行なう時は、鋤のない三尺三寸の木刀を用いた祖流である。雖井蛙流によく似たものであったといわれるが、竹刀を用いた撃刺試合が重じられたので、この時には長い竹刀を用いたという。長竹刀の使用は、このころの新しい傾向で藩内他流には見られない特色である。

正固は、近畿・山陽をめぐって修業を重ね、名声が高まるにつれ、米子だけでなく鳥取城下からも入門する者が多く、米子・鳥取を往来してこれを教えた。文化三年（一八〇六）藩主斉邦は彼の門弟の試合を親覧しており、藩内でも広く認められるところとなったが、文化十三年（一八一六）五月、五十一才でなくなった。

兎山流の道統は荒尾時太郎・柴山清晶の弟又衛門正義が鳥取の石河氏を継ぎ鳥取に住んでから鳥取にも兎山流の師範家が出来、この流れの中からも幕末に至って詫間樊六等の俊秀が生まれ、兎山流は藩内のみならず全国的にも知られるようになった。

兎山流を修めた人々の中には、先の詫間をはじめ、神戸直方・足立正声・松田道之・井上清人・秋田実等幕末維新期に政治的な活躍をした人が多かったことも注目しなければならない。

神刀兎山流（しんとうださん流）

浅田主計為保のはじめた流派である。浅田家は三百石の鳥取藩士である。浅田平馬の長男として文化八年（一八一二）に生まれ、弘化四年、三十九才で家督をついだ。

初め石河正義について兎山流を学び免許を受け、「近世試合の達人」と称せられるほど技倆抜群であったが、わけあって、石河の門を辞し、同じ兎山流で

今枝流（いまえだ流）

今枝流は、寛永のころ、丹後の宮津京極氏の臣今枝弥右衛門良重が一伝流の居合の奥儀を極め、さらにその子良政とともに工夫して一流をたてたものである。寛文八年、良政は主家の滅封により浪人した。やがて近江膳所本多兵部に仕え、弟の佐仲良堅は伯耆に移り、池田家家老荒尾志摩に仕えた。

良堅の子良台は、正保三年（一六四六）倉吉に生れ、倉吉大岳院で学問を修めた。一方兵法修業も熱心で、諸國をめぐって新陰流以下諸流を修業し、江戸で伯父良政にも学んだ。

一時期、高槻の永井氏に仕えたこともあったが、再び浪人して兵法修業に専念し、伯父のあとをうけて江戸小石川御徒町で道場を開いた。今枝流が天下に知られるようになったのは良台によるところが多いといえる。

倉吉における今枝流は良堅・良次・良英とつづき、さらに倉吉荒尾の組士小谷助兵衛尚永・衣笠舎政・不破平内にと道統はひろがり鳥取・倉吉、さらに米子にも広まった。今枝流は、鳥取藩内だけでなく、良重・良政・良台やその門人達によって宮津・津山・善所・伊賀・江戸等にも伝えられた。

一刀流（河田派）

一刀流は伊豆の伊藤景久（一刀斎）の創始した流派である。一刀流の鳥取藩への伝播は鳥取藩の伏見留守居役河田左助仲行が寛保年中（一七四一—四三）田辺藩の尾形惟長について皆伝を受けたのにはじまる。

尾形の一刀流は、一刀斎から小野忠明・伊藤忠也・古屋信知・生田正映・尾形惟長と伝えられたものである。この流れは一刀流の小野派から忠也派となり、さらに古屋信知によって神武一刀流と変化した流れである。

ところで、河田仲行が鳥取に伝えた一刀流の流を「武芸流派辞典」・「皇國武術英名録」は一刀流河田派と記している。仲行がいつから河田派を立てるか明らかではないが、河田景与の自筆の「河田佐久馬（景与）履歴」の中に、仲行のことが「一刀流を丹州田辺藩士尾形儀太夫先生に学び、蘊奥を極む、後、発明する所あり、撃突手業を改む。門人数百人、某術當時行はる」と書かれている。仲行は風伝流の槍を学んだというから槍の業を組み入れることによって

一派をなしたものであろう。

河田家は代々鳥取藩の伏見留守居役で、二百石の家であった。仲行はその五代、その後六代兵蔵仲直―七代段之丞仲匡―八代佐助景須―九代佐久馬介景一―十代佐久馬景与とつづく。十代の佐久間景与は、鳥取藩専振派のリーダーで、因州二十士の首領であり、薩藩置儀後初の鳥取県権令となり、後元老院議員を勤め子爵になった。一方武道もすぐれており、宮中に設けられた「済寧館」の剣術師範に命じられた剣の使い手であった。

景与は、祖父景順に学び、さらに奥野左蔵に練えられて、その門をつぎ、この間、飯篠貞盛・石原常徳らとも交渉をもって河田派を継承発展させた。彼の門弟には河田明・戸田元作・安住喜忠があり、兵庫の豪商北風正造も景与に剣を学んだという。

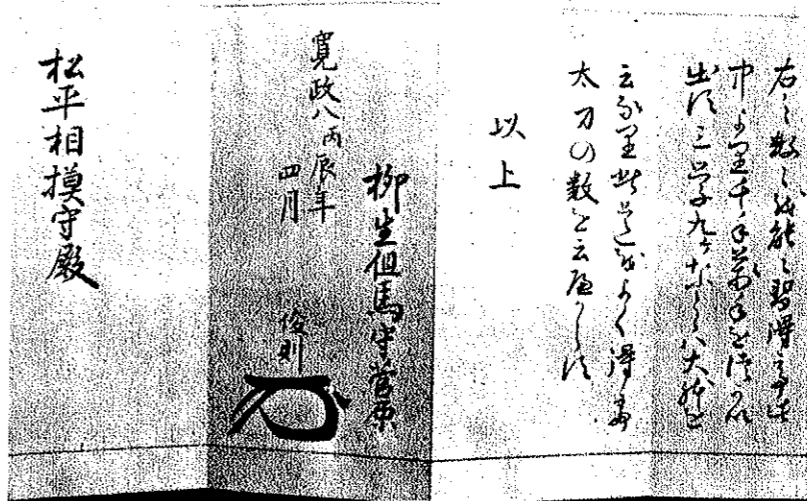
理方得心流(りかたとくしん流)

遠藤十太夫保胤の始めた流派である。遠藤家はもと宇喜多家の家臣であったが、宇喜多滅亡後、池田忠雄に召抱えられて鳥取池田家の家中となった家である。保胤は安永二年(一七七三)鳥取に生れ、今知家東池田家の仲律に仕えた。幼少から武芸を好み、武芸諸般五十余流の免許をうけ、とくに、刀法にすぐれ、衣笠定右衛門會政について今枝流の印可をうけた。その上、東軍流・富田流・離井蛙流・竹内流など諸流を研究して工夫したのが理方得心流である。

理方得心流は、居合を主とした流派で、型は仕太刀は鞘入りの木太刀をもち、打太刀は袋竹刀をもって行った。遠藤から接近し機を見て行なう抜き討と、その敵の斬撃に対し瞬間に対をかわずくことを訓練の中心とした。試合は、型とほぼ同様であった。仕太刀は道具をつけず鞘入りの木太刀をさして抜き討ち、入身を練習し、打太刀は面と甲手をつけ袋竹刀を打ち、主として八相に構えて、撃つべき隙を発見して、仕太刀の斬撃をかわして甲手・袈裟に斬撃を加えて行った。

この派の道具は面金が荒くて山型が低く、面ぶとんにあたるところは竹の骨をのみ、それに和紙をかさねて厚く張ったものである。甲手も紙張りの抜きで、肘まで揃う大型のもので、拳の部分は掌平のあたりが空洞になっていて竹刀を入れ握るようになってあるなど工夫がこらされていた。

その道統は毛利孫左衛門忠伝、原直温に伝えられ、忠伝から辻秀実、さらに米村所右衛門へと伝えられた。安政のこと、門人の辻直明らは、師保胤の徳をしのび倉田八幡宮に小さな祠堂をつくり肖像を納めて保胤靈神としてこれを尊崇したという。



「新陰流伝書」六代藩主池田治道に授けられたもの

槍 術

(番号) (史料名) (伝授者・受伝者) (年月日) (形態) (所属) (成立)

一貫流 (鳥取)

1 一貫流刀槍一致槍術初伝正意

冊子 山根幸恵蔵

伝系

大野一貫―大野一徳―大野一貫(再)―松尾左平太主信―井関儀左衛門祐定

遠藤平作思忠―遠藤作右衛門以貫

保坂金右衛門政在―松尾元之進主忠―佐藤庄蔵清治―河毛勘

遠藤作右衛門了平之貫

一徳流 (鳥取)

1 一徳流槍目録

神平四郎 花房隼馬 天保三年 卷子 山根幸恵蔵

伝系

沢九之平重久―佐分利忠兵衛重元―沢半太郎正本―沢庄七正重―沢善内正吉

河島理左衛門雅局

鱸孫左衛門時俊

平尾甚右衛門正澄―戸田久七景綱―毎野彦

右衛門久親―毎野次右衛門政久―戸田景敦惣馬―神平四郎茂知―花房隼馬

梶浦政忠清兵衛

以上

大塩与左衛門

伊東流一指伝

1 伊東流一指伝長刀中極意五術虎之巻 安達辰三郎 山内鹿蔵 弘化三年五月 卷子 鷺見文書

伝系

安達辰三郎―山内鹿蔵

伊東流

1 伊東流長刀中極意五術 山内善兵衛俊正 岡田仙蔵 天保六年八月 卷子 岡崎平内

伝系

伊東紀伊守祐忠―松本一指定義―松本理齋定治―松本節外定好―松本理左衛門定國

水野伴太左衛門道武―山田永田―遠藤十太夫保胤―山内善兵衛俊正

安達辰三郎方之―原勇右衛門直温―安達辰三郎方之―山田尚右衛門

岡田仙蔵

新陰正田流

1 新陰流天狗書口伝 猪田伊折佐 加藤清兵衛 寛永六年九月 冊子 山根

- 幸惠藏 ㊦
- 2 新陰定田流目錄定中之卷 奥田喜三郎 小谷左源太 天保十一年六月折本 山根幸惠藏 ㊦
- 3 新陰定田流伝書 八田清林入道政久 鈴木小輔 元治元年八月 折本 山根幸惠藏 ㊦
- 4 印可 佐藤政治 鈴木源太郎 明治四十四年 折紙 山根幸惠藏 ㊦

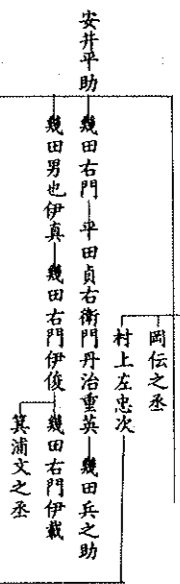
猪多伊織佐重能—加藤十左衛門正次(鳥取藩)—八田作右衛門正吉—河合弥三兵衛秀正(鳥取藩)—八田作左衛門高任—八田作右衛門高兼—山崎六郎左衛門

種田流

- 1 種田流槍術初段之伝 幾田右門伊俊 鷺見藤三郎 安政五年四月 折本 藤政資料 ㊦
- 2 種田流槍術伝書 平田定右衛門弥吉 岡伝之丞 享保二十年十二月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 3 種田流槍術伝書 平田重右衛門重方 幾田右門 安永九年七月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 4 種田流槍術伝書 平田真右衛門丹治重英 幾田兵之助 文化九年十一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 5 種田流槍術免許目録 村上左忠次 幾田右門 文化十一年 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 6 種田流槍術印可傳 幾田右門伊俊 箕浦文之丞 安政六年三月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 7 種田流槍術伝書 幾田右門伊俊 西川芳三郎 安政二年十二月 卷子 大下家文書 ㊦

伝系

大島雲平吉綱—月瀬伊左衛門清信—種田平馬正幸—種田市左衛門幸勝—種田市左衛門幸忠—平田定右衛門弥吉—平田重兵衛重方—

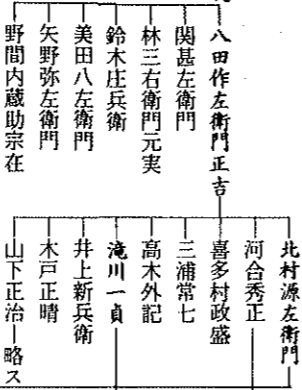


正田流 (五具足)

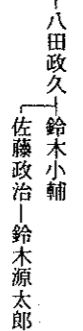
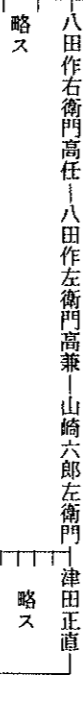
- 1 正田流強弱之卷 玉虫周治 玉虫恒太郎 天保三年六月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 2 正田流強弱之卷 岩越次郎兵衛重輔 安政二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 3 正田流定中之卷 岩越次郎兵衛重輔 安政二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 4 正田流灌頂之卷 岩越次郎兵衛重輔 安政二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 5 正田流諸学集目錄 岩越次郎兵衛重輔 安政二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 6 丹羽九良兵衛長寧藏書 八田家藏書 冊子 山根幸惠藏 ㊦
- 7 正田流槍術傳書 井上平次郎利和 冊子 山根幸惠藏 ㊦
- 8 正田流遺書補欠 明石善之(書) 冊子 山根幸惠藏 ㊦

伝系

猪多伊織佐重能—加藤十左衛門正次



北村重煇齊—荒尾真勇軒—奥田喜三郎



劍術

雖井蛙流 (鳥取)

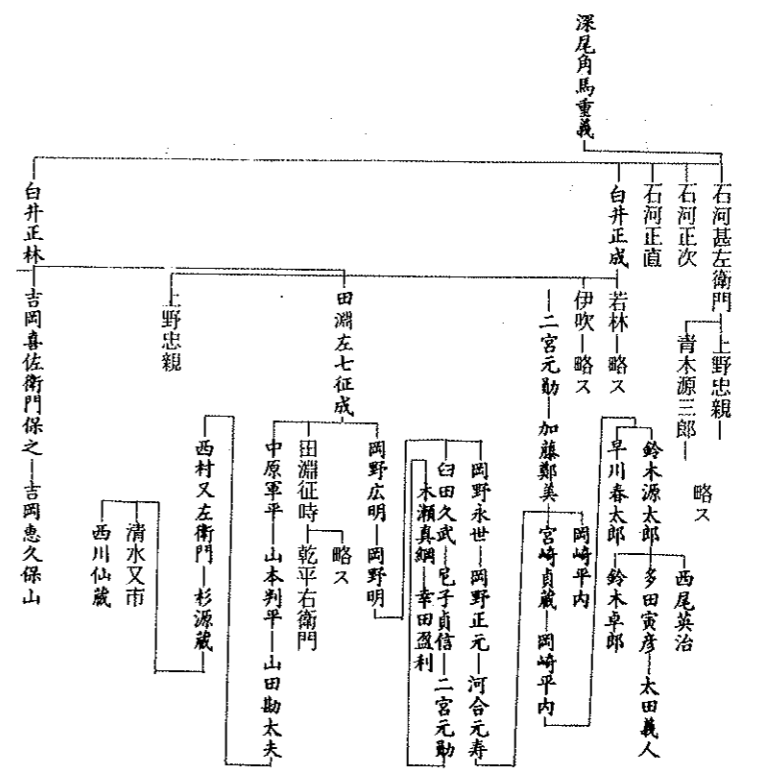
- 1 雖井蛙流夢想萬勝之卷 白井半右衛門 花房辰三郎 文政十一年五月 卷

- 子 鷺見文書 ㊦
- 2 雖井蛙流夢想萬勝之卷 岡野久次郎正元 鷺見藤三郎 文久三年十月 卷子 鷺見文書 ㊦
- 3 乾長孝著井蛙正伝語海 河合與七郎元寿 岡崎平内 明治二十九年六月 冊子 岡崎文書 ㊦
- 4 乾長孝著井蛙正伝 冊子 岡崎文書 ㊦
- 5 雖井蛙流平法利集卷 加藤鄭美 岡崎平内 明治二十三年五月 折紙 岡崎文書 ㊦
- 6 雖井蛙流平法夢想秘極卷 宮崎貞藏正功 岡崎平内 明治二十九年五月 折紙 岡崎文書 ㊦
- 7 雖井蛙流平法利集之卷授与 加藤鄭美 岡崎平内 明治二十三年五月 卷子 岡崎文書 ㊦
- 8 雖井蛙流平法允可 宮崎貞藏正功 岡崎平内 明治二十九年五月 卷子 岡崎文書 ㊦
- 9 雖井蛙流平法夢想秘極卷 河合與七郎元寿 岡崎平内 明治二十九年五月 卷子 岡崎文書 ㊦
- 10 雖井蛙流平法夢想萬勝卷 岡崎平内 宛なし 明治三十三年六月 卷子 岡崎文書 ㊦
- 11 雖井蛙流平法夢想萬勝卷 岡崎平内 吉岡寅彦 明治三十年十一月 卷子 多田文書 ㊦
- 12 雖井蛙流平法奧儀伝書 鈴木源太郎 多田寅彦 大正十五年七月 多田文書 ㊦
- 13 雖井蛙流平法醬紙卷 岡崎文書 ㊦
- 14 雖井蛙流平法目録 多田文書 ㊦
- 15 雖井蛙流劍術蘆奥口決補註并図式 多田文書 ㊦
- 16 雖井蛙流平法利集之卷 二宮元勳 平野告之丞 安政六年 卷子 平野家文書 ㊦
- 17 雖井蛙流平法夢想萬勝之卷 卷子 鷺見氏 ㊦
- 18 井蛙流覚書並二平法百首 明和七年十二月 山根幸惠藏 ㊦
- 19 雖井蛙流夢想萬勝之卷 杉権藏 西川仙藏 文化十年十二月 卷子 大下

- 家文書 ㊦
- 20 雖井蛙流夢想萬勝之卷 河合與七郎 鈴木源太郎 明治三年六月 卷子
 - 21 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 鈴木源太郎 明治三十年一月 卷子 鈴木家文書 ㊦
 - 22 雖井蛙流平法夢想秘極卷 岡崎平内 鈴木源太郎 明治三十二年一月 卷子 鈴木家文書 ㊦
 - 23 雖井蛙流平法夢想秘極卷 宮崎貞藏正功 佐野君郷 明治三十三年五月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 24 雖井蛙流平法夢想萬勝卷 岡崎平内 西尾英治 明治三十四年一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 25 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 鈴木卓郎 明治三十七年一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 26 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 西尾英治 明治四十四年一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 27 雖井蛙流平法夢想秘極卷 鈴木源太郎 西尾英治 大正七年六月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 28 雖井蛙流平法夢想秘極卷 鈴木源太郎 鈴木卓郎 大正七年六月吉日 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 29 雖井蛙流平法傳書 鈴木源太郎 鈴木卓郎 大正十五年七月 山根幸惠藏 ㊦
 - 30 雖井蛙流劍術平法免許狀 鈴木源太郎 西尾英治 大正十五年七月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 31 雖井蛙流平法允可 多田寅彦 太田義人 昭和十八年八月 折紙 山根幸惠藏 ㊦
 - 32 雖井蛙流平法夢想萬勝之卷 鈴木卓郎 鈴木正達 昭和二十年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
 - 33 雨夜筆談一卷五卷 上野忠親著 山根幸惠藏 ㊦
 - 34 井蛙語海 上野忠親編 山根幸惠藏 ㊦
 - 35 雖井蛙流夢想萬勝之卷 冊子 山根幸惠藏 ㊦

- 36 雖井蛙流平法劍術允可必勝唯一人伝口決 冊子 山根幸惠藏 ㊦
- 37 雖井蛙流平法夢想萬勝之卷口伝 冊子 山根幸惠藏 ㊦
- 38 雖井蛙流平法口訳自萬勝之卷至秘極之卷写 山根幸惠藏 ㊦
- 39 雖井蛙流深尾角馬墓所について 抜粋 山根幸惠藏 ㊦
- 40 雖井蛙流兵法夢想萬勝之卷 田中兵藏 西川芳三郎 嘉永三年十二月 卷子 大下家文書 ㊦

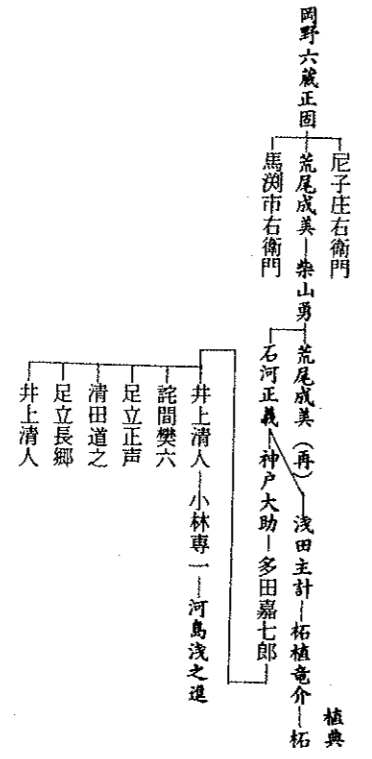
- 20 雖井蛙流夢想萬勝之卷 河合與七郎 鈴木源太郎 明治三年六月 卷子
- 21 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 鈴木源太郎 明治三十年一月 卷子
- 22 雖井蛙流平法夢想秘極卷 岡崎平内 鈴木源太郎 明治三十二年一月 卷子
- 23 雖井蛙流平法夢想秘極卷 宮崎貞藏正功 佐野君郷 明治三十三年五月 卷子
- 24 雖井蛙流平法夢想萬勝卷 岡崎平内 西尾英治 明治三十四年一月 卷子
- 25 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 鈴木卓郎 明治三十七年一月 卷子
- 26 雖井蛙流平法利集卷 岡崎平内 西尾英治 明治四十四年一月 卷子
- 27 雖井蛙流平法夢想秘極卷 鈴木源太郎 西尾英治 大正七年六月 卷子
- 28 雖井蛙流平法夢想秘極卷 鈴木源太郎 鈴木卓郎 大正七年六月吉日 卷子
- 29 雖井蛙流平法傳書 鈴木源太郎 鈴木卓郎 大正十五年七月 山根幸惠藏
- 30 雖井蛙流劍術平法免許狀 鈴木源太郎 西尾英治 大正十五年七月 卷子
- 31 雖井蛙流平法允可 多田寅彦 太田義人 昭和十八年八月 折紙
- 32 雖井蛙流平法夢想萬勝之卷 鈴木卓郎 鈴木正達 昭和二十年四月 卷子
- 33 雨夜筆談一卷五卷 上野忠親著 山根幸惠藏
- 34 井蛙語海 上野忠親編 山根幸惠藏
- 35 雖井蛙流夢想萬勝之卷 冊子 山根幸惠藏



兎山流 (鳥取)

- 1 兎山流擊刀入室印可 神戸大助直方 天野武兵衛 嘉永六年三月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 2 兎山流初官免狀 神戸大助直方 吉田鉄藏 安政五年一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦

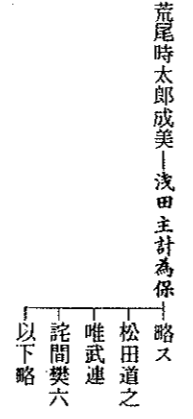
安場武治—安場俊方—其浦正方—尾崎叔周—岸原芳之—田中兵藏—西川芳三郎



神刀兎山流 (鳥取)

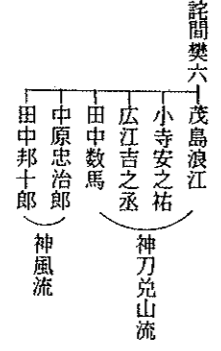
- 1 神刀兎山流擊刀初段 浅田主計為保 山根幸惠藏 ㊦
- 2 神刀兎山流擊刀初段 浅田主計 平野告之丞 嘉永七年 卷子 平野家文書 ㊦
- 3 神刀兎山流擊刀中段 浅田主計 平野告之丞 安政六年 卷子 平野家文書 ㊦

傳系



神風流 (鳥取)

- 1 神風流神刀伝初段 詫間樊六敬敷 安政四年十一月 卷子 山根幸惠藏 ㊦



今枝流 (鳥取)

- 1 今枝流中段授与劍名目録 遠藤十太夫保胤 佐野藤左衛門 寛政十一年八月 卷子 山根幸惠藏 ㊦
- 2 理方今枝流刀術之書 遠藤十太夫保胤 山根幸惠藏 ㊦

伝系

今枝定之—今枝良恭—今枝良安—辻頼佐直明—和嶋敬之助

今枝良台佐仲

今枝主馬—今枝佐仲良真—今枝良尚—今枝良全—今枝良益
今枝良英—小谷勘兵衛尚水—衣笠舍政—衣笠重澄—小泉十右衛門
以下略ス 浅田昌福—伊木隼太

遠藤十太夫保胤—以下略ス

三浦好長—三浦駿河

唯源吾—三浦主水

藤左衛門

略ス

理方得心流 (鳥取)

- 1 理方得心流観学之卷 遠藤十太夫保胤 寛政五年孟夏 卷子 岡崎家文書
- 2 理方得心流 遠藤十太夫保胤 岡崎鉄之介 寛政十一年二月 卷子 岡崎家文書
- 3 理方得心流 遠藤十太夫保胤 岡崎平蔵 寛政十一年二月 卷子 岡崎家文書
- 4 理方得心流撃刀中段心法 原勇直温 岡田仙蔵 天保八年二月 卷子 岡崎家文書
- 5 理方得心流居合剣術中段伝書 辻惣右衛門真鎮 和嶋敬之助 嘉永六年九月 卷紙 山根幸恵蔵
- 6 理方剣術観学之卷 遠藤十太夫保胤 佐野藤左右衛門 寛政八年六月 卷子 山根幸恵蔵
- 7 理方初実剣許証 辻頼佐直明 和嶋敬之助 嘉永七年九月 卷子 山根幸恵蔵

- 8 理方大極意口伝 山本頼佐 和嶋敬之助 慶応元年八月 卷子 山根幸恵蔵

伝系

遠藤十太夫保胤—辻頼佐直明

辻惣右衛門直鎮

一刀流

- 1 一刀流兵法目録 河田左助仲行 大嶋学次郎 安永二年五月 卷子
- 2 一刀流兵法目録 河田仁八郎景武 寛政九年十一月 卷子 鈴木文書
- 3 一刀流伝書(唐津藩) 村田幕右衛門正診 清水信蔵 天保四年 卷子
- 4 一刀流極意之書 横帳 田中裕文書
- 5 一刀流極意秘傳手控 横帳 田中裕文書

伝系

井藤景久—小野忠明—井藤忠也—古屋信知—生田正映—尾形惟善

河田左助—河田景武—北村広良—石尾兵蔵

大嶋学次郎—石原常徳—河田左久馬景与

奥野真蔵—奥野左蔵

岩流

- 1 岩流剣術秘書 册子 山根幸恵蔵

伝系

加賀重信—香河政信

小川吉信—小川信春—小川信名—小川信之—菅道清

香河伸庸—香河伸衛—香河伸富—香河伸英—香河伸親

小谷成福—小谷成雄—山住年延

小谷成美—山住本至

各努弘人—香河伸久

武田鉄平

鏡新明知流

- 1 鏡新明知流二之目 曾根慶三郎繁延 寛周蔵 天保十五年五月 卷子 岡崎家文書

伝系

曾根慶三郎繁延—寛周蔵

直心影流

- 1 直心影流兵法目録 赤羽永蔵藤原伊清 幾田右門 文化十五年春 卷子 山根幸恵蔵
- 2 直心影流伝書目録添状 赤羽永蔵藤原伊清 幾田右門 文化十五年春 卷子 山根幸恵蔵

伝系

山田平左衛門光徳—長沼四郎左衛門國郷—長沼四郎左衛門徳郷—以下略ス

神道無念流

- 1 神道無念流初巻切紙 桑原伴右衛門重臣 成田彦三郎 文政九年七月 卷子 田中裕文書

伝系

桑原伴右衛門重臣—成田彦三郎

富田信流

- 1 富田信流居合兵法目録 鷺見文書

伝系

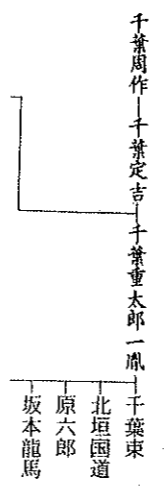
竹内冲良—小谷妻—宮脇長昌—山田鎮休—高見長祥—横河友繁—百々宜平

河端喜兵衛

北振一刀流

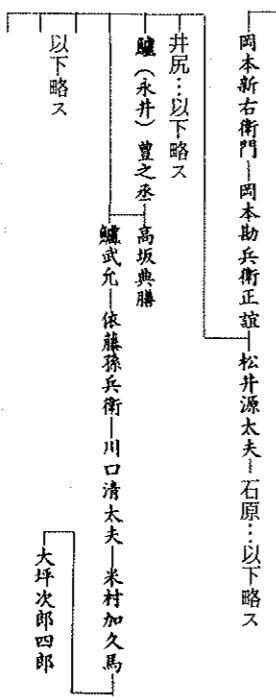
- 1 北振一刀流兵法箇條目録 千集定吉政道 野々村彦三郎 天保十年十一月

- 十四日 卷子 田中裕文書 ㊟
- 2 北振一刀流兵法中目錄 千葉定吉政道 野々村彦三郎 嘉永元年十二月二十七日 卷子 田中裕文書
- 3 北振一刀流劍術起請文 小谷周次郎他三十八名 安政二卯年十二月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 4 北振一刀流剪紙 清水小十郎宣通 野々村鈔吉 安政六己未年正月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 5 北振一刀流兵法簡條目錄 清水小十郎宣通 野々村鈔吉 安政六己未年正月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 6 北振一刀流剪紙 野々村彦三郎忠義 森本利三郎 文久四年正月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 7 北振一刀流剪紙 野々村彦三郎忠義 中野宜次郎 元治二丑年四月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 8 北振一刀流劍術稽古肝要之卷 砂川喜武 岡崎可盛 明治四十二年六月 卷子 田中裕文書 ㊟
- 9 北振一刀流兵法目錄極意 千葉周作成政 卷子 田中裕文書 ㊟
- 10 北振一刀流切紙并目錄之文(写) 横帳 田中裕文書 ㊟
- 11 北振一刀流兵法簡條目錄 横帳 田中裕文書 ㊟
- 12 北振一刀流兵法目錄極意 千葉周作成政
- 13 北振一刀流大目錄皆伝免許 田中清八郎吉政 壁広宇一郎 明治四十年正月 卷子 ㊟
- 14 北振一刀流兵法目錄 千葉十太郎 平野告之丞 元治元年三月 卷子 平野家寄託 ㊟ 桐箱入



- 幸惠藏 ㊟
- 13 武藏田明流膺之卷 寛政二年九月九日 冊子 山根幸惠藏 ㊟
- 14 武藏田明流表目錄口訣 鱸時惟(親水軒) 依藤長順 寛政七年十月 山根幸惠藏 ㊟
- 15 武藏田明流修業等級同伝授控書 大坪次郎四郎 明治十八年二月十日 冊子 山根幸惠藏 ㊟
- 16 武藏田明流相統由来之卷 鱸武之允時惟(述) 冊子 山根幸惠藏 ㊟
- 17 田明武藏流表勝之傳口授 鱸武之允 山根幸惠藏 ㊟
- 18 入学姓名録 冊子 山根幸惠藏 ㊟
- 19 武藏流劍術傳系 山根幸惠藏 ㊟

岡本新右衛門義次—岡本小四郎—岡本馬之輔—岡本助左衛門—岡本清八—

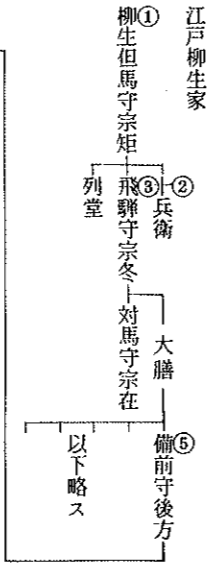


- 柳生新陰流
- 1 兵法太刀名目錄 柳生但馬守俊則 松平相模守 寛政八年四月 折本 藩政史料 ㊟
 - 2 新陰流兵法目錄 柳生但馬守俊則 松平相模守 寛政八年四月 折本 藩政史料 ㊟



- 武藏田明流
- 1 武藏田明流入門誓約書 師範永井水翁 誓約者高坂典勝景子外三名 天明七年九月 巻紙 河毛文書 ㊟
 - 2 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者能勢代太郎 明治十六年 河毛文書 ㊟
 - 3 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者川口幸造 明治十六年 河毛文書 ㊟
 - 4 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者廣田平太郎廣光 明治十六年 河毛文書 ㊟
 - 5 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者川口清馬忠実 明治十六年 河毛文書 ㊟
 - 6 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者宮崎義純 明治十七年 河毛文書 ㊟
 - 7 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者永原寿雄正道 明治十七年 河毛文書 ㊟
 - 8 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者山住清篤正 明治十七年 河毛文書 ㊟
 - 9 武藏田明流入門誓約書 師範大坪治郎四郎 誓約者岡本正頭 明治十八年 河毛文書 ㊟
 - 10 武藏田明流入門誓約書 師範能勢源太郎 誓約者羽原磊雄 明治二十四年 河毛文書 ㊟
 - 11 武藏田明流入門誓約書 師範能勢源太郎 誓約者石原淳太郎 明治二十四年 河毛文書 ㊟
 - 12 武藏田明流極意伝書写 岡本正誼 松井清雄 宝曆六年三月十二日 山根

- 3 新陰流兵法太刀目錄 柳生但馬守俊章 松平因幡守 天保八年十一月 折本 藩政史料 ㊟



- 居合 (鳥取)
- 1 化頭流居合心行目錄 大塩恵治郎 吉田權太郎 宝曆十二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 2 化頭流居合心行目錄 大塩恵治郎 梶川七右衛門 明和三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 3 化頭流居合頭得之巻 猪股平市敷文 安養寺左馬次郎 文化十三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 4 化頭流居合運策之巻 猪股平市敷文 文化十三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 5 化頭流居合運策之巻 猪股平市敷文 吉田牧藏 文政三年正月 卷子 山

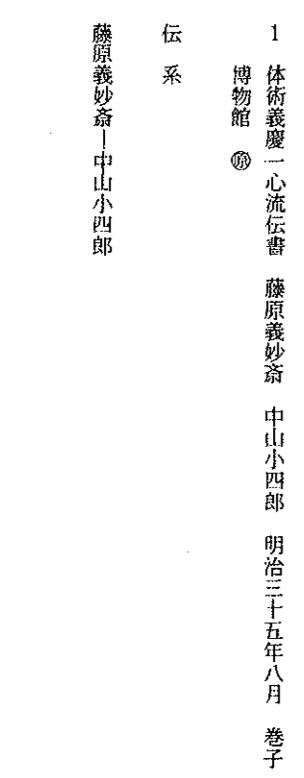
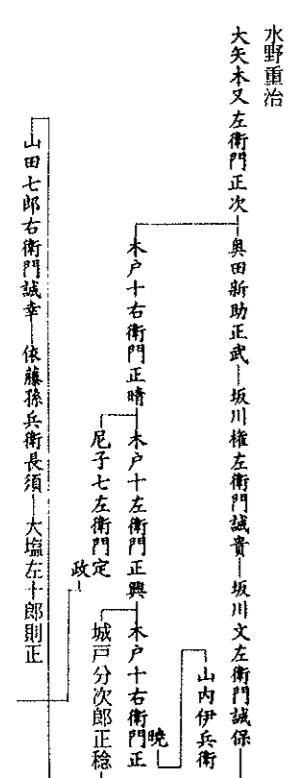
- 化頭流居合
- 1 化頭流居合心行目錄 大塩恵治郎 吉田權太郎 宝曆十二年四月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 2 化頭流居合心行目錄 大塩恵治郎 梶川七右衛門 明和三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 3 化頭流居合頭得之巻 猪股平市敷文 安養寺左馬次郎 文化十三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 4 化頭流居合運策之巻 猪股平市敷文 文化十三年正月 卷子 山根幸惠藏 ㊟
 - 5 化頭流居合運策之巻 猪股平市敷文 吉田牧藏 文政三年正月 卷子 山

- 根幸惠藏 ①
- 6 化頭流居合免狀之卷 猪股平市敷文 吉田平馬 文政八年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 7 化頭流居合哥之卷 猪股平市敷文 天野武兵衛 文政十一年 卷子 山根幸惠藏 ①
- 8 化頭流心行之卷秘哥 猪股平市敷文 吉田志賀之助 天保三年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 9 化頭流居相心行目錄 猪股平市敷文 吉田志賀之助 天保三年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 10 化頭流居相顯得之卷 猪股平市敷文 吉田志賀之助 天保五年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 11 化頭流居相運策之卷 猪股平市敷文 吉田志賀之助 天保五年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 12 化頭流居相心行之卷 吉田平馬 乾鉄次郎 安政三年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 13 化頭流居相哥之卷 吉田平馬 名倉勇次郎 安政五年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 14 化頭流居相心行目錄 吉田平馬 名倉勇次郎 安政五年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 15 化頭流居相心行目錄 吉田平馬 佐分利外三郎 安政五年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 16 化頭流居相心行目錄 吉田志賀之助 中村芳之助 万延二年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 17 化頭流居相心行哥卷 吉田志賀之助 中村芳之助 文久元年正月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 18 化頭流居相伝書 吉田 鈴木卓郎 昭和十一年七月 山根幸惠藏 ①

- 深尾角馬重義—石河甚右衛門—石河四方左衛門正次—大塩忠次郎包忠—大塩宇兵衛通武—堀川七右衛門—吉田牧藏—吉田知方—佐分利外三郎—吉田志賀之助
- 井星安心流 (鳥取)
- 1 井星安心流居合進履之卷自序 卷子 山根幸惠藏 ①
- 2 井星安心流居合進履之卷自序 卷子 山根幸惠藏 ①
- 3 井星安心流居合進履之卷 野田兵七 西川仙藏 文化十年十二月 卷子 大下家文書 ①
- 伊藤甚兵衛
- 白井正林—田淵佐七征成—田淵利三郎征時—岸権藏—中原義美—山田房照—野田兵七—西川仙藏
- 水野流
- 1 水野流居合彌和羅序授心鏡 十戸十右衛門正晴 森淺右衛門 宝永六年七月 折本 藩政資料 ①
- 2 水野流居合彌和羅序覺道鏡 十戸十右衛門正晴 森淺右衛門 宝永六年七月 折本 藩政資料 ①
- 3 水野流居合彌和羅序皆婦 十戸十右衛門正晴 森淺右衛門 宝永六年七月

- 折本 藩政資料 ①
- 4 水野流居合彌和羅序授心鏡 築田彦四郎 森佐左衛門 宝曆二年三月 卷子 鷺見文書 ①
- 5 水野流居合彌和羅序許可 月 卷子 鷺見文書 ① 木戸十右衛門正晴 山内伊兵衛 宝曆十四年一月
- 6 居合彌和羅脇指合之卷 依藤孫兵衛長須 天保七年十一月 卷子 藩政資料 ①
- 7 居合彌和羅稽古心持之事 依藤孫兵衛長須 天保七年十一月 卷子 藩政資料 ①
- 8 水流居合弥和羅序并目錄上 依藤孫兵衛長須 天保十年三月 卷子 藩政資料 ①
- 9 水流居合弥和羅意極并秘歌中 依藤孫兵衛長須 天保十年三月 卷子 藩政資料 ①
- 10 水流居合弥和羅印可下 依藤孫兵衛長須 天保十年三月 卷子 藩政資料 ①
- 11 水野流一貫派居合弥和羅初段 鈴木卓郎 昭和七年十二月 卷子 山根幸惠藏 ①
- 12 水野流授心鏡之卷 田中兵藏 西川芳三郎 弘化四年十二月 卷子 大下家文書 ①
- 13 水野流居合伝書巻物類写し出し 冊子 大下家文書 ①

- 夢想流
- 1 夢想流居合起請文前書之事 鷺見善兵衛宛 秋里喜平他十五名 万治三年十一月 卷子 鷺見文書 ①
- 柔
- 荒木新流
- 1 荒木新流小書 文政九年三月 横帳 田中裕文書 ① 成田彦三郎
- 義慶一心流
- 1 体術義慶一心流伝書 藤原義妙斎 中山小四郎 明治三十五年八月 卷子 博物館 ①
- 伝系
- 藤原義妙斎—中山小四郎



関口流

- 1 関口流柔誘引書 河崎六郎兵衛 森左源太 文化九年十二月 卷子 鷺見文書 ㊦
- 2 関口流太刀目録序 岩城友右衛門一信 羽田助之進 寛保元年九月 折本 山根幸恵蔵 ㊦

伝系

岩城友右衛門→羽田助之進
 関口弥左衛門氏重→関口八郎左衛門氏成→天羽勘解由重久→米村所平広貞

佐分利三郎左衛門成実→佐分利三郎左衛門

河崎六郎兵衛改方→森左源太
 以下略ス

八幡流

- 1 八幡流弥和羅尊天卷中極意 西原小三郎長保 山間鹿蔵 弘化五年二月 卷子 鷺見文書 ㊦

伝系

毛利広衛元足→西原小三郎長保

荒木平也保之
 山内鹿蔵

体術

一当流

なお目録中の成立の項は、㊦と㊧の記号で示した。原は当館に原本が所蔵・寄託されているもの、複は、ゼロックスによる複写本で当館が所蔵しているものである。

藩政資料 当館が所蔵する「鳥取藩池田家史料」のことである。鳥取藩池田家史料は藩政記録を中心に一万五千点におよぶ史料である。

河毛文書 武蔵田明流・一貫流の師範家であった河毛勘の子孫の家に伝えられた史料で、現在当館に寄託中である。

岡崎文書 岡崎平内可親は旧鳥取藩士で初代鳥取市長を勤めた人、雖井蛙流・理方得心流を伝えた。岡崎家文書は本年度当館に寄贈された史料である。

多田家文書 多田家は旧鳥取藩士で、多田寅彦は雖井蛙流を明治・大正に伝え、多田家文書は当館に寄託中である。

鷺見文書 鷺見家は旧鳥取藩士、鷺見休明・安愼等は国学をよくしたが、兵学・武芸にもすぐれており、鷺見家の兵学・軍学書は、江田島の旧海軍兵学校の参考館におさめられていた。鷺見家文書の一部は当館が所蔵している。

田中裕文書 旧制鳥取中学校教師であった田中瑞穂氏の家に伝えられた文書で、その一部が子孫田中裕氏（大津市在住）によって当館に寄託されている。

鈴木文書 鈴木家は旧鳥取藩士で、源太郎は雖井蛙流・武蔵田明流を伝えて明治・大正に活躍した人で、「鳥取藩史」の武芸を執筆した人である。

大下家文書 大下（おおしも）武士氏の所蔵文書で大下氏の母方から伝わった文書である。

山根幸恵蔵 当館館長山根幸恵の収集史料である。山根は剣道八段・居合七段

- 1 一当流夜燈 岸本如圭実連 花房源太良 安政三年辰 卷子 山根幸恵蔵 ㊦

- 2 一当流必勝之巻 岸本如圭実連 花房源太良 安政四年四月 卷子 山根幸恵蔵 ㊦

- 3 一当流必勝之巻 岸本如圭実連 花房唯治良 安政四年四月 卷子 山根幸恵蔵 ㊦

伝系

青木庄次郎→岸本如圭→花房源太良

日上真明流（鳥取）

- 1 日上真当流前書 辻頼佐直明 和嶋敬之助 嘉永四年十一月 卷子 山根幸恵蔵 ㊦

伝系

遠藤十太夫保胤→辻頼佐直明

永島嘉助幸信→山本頼佐直明
 和嶋敬之助

資料の所属について

本報告書にとりあげた武道関係資料は、原本かゼロックス複写本、マイクロフィルム等で当館が所蔵している資料である。それぞれの資料は、槍・剣・居合・柔・体術に分類し、さらに流派ごとに整理して資料目録を付けた。目録の中でこれ等の資料の所属を記したが、これについて簡単に解説しておく。

・全日本剣道連盟評議員・資料調査委員。早くから武道史の研究に着手し、武道関係史料の収集につとめている。また、鳥取に生れた代表的古流である雖井蛙流の継承・資料蒐集等に努力している。

あとがき

- 一、目録は、整理番号、史料名、伝授者、受伝者、年月日、形態、所属、成立の順で記載した。
- 二、各武芸流派の配列は、鳥取藩の人により創始されたものを派生順に、他藩から伝えられた流派は五十音順に配列した。
- 三、伝系は、当目録で確認できた部分、及び、藩史記載の伝系に付け加えた部分については正楷書であらわした。
- 四、伝系譜は、すでに発表されているものと、いささかの相違のあるものもあった。今後の資料に期待したい。
- 五、今後の研究・調査により、近世を支えた武士集団の精神的根幹に於ける武道の果たした役割、言うならば武道学によって培われた精神構造への展開等にも言及したいものである。
- 六、この調査報告書の作成は主として山根文子があたった。本報告書の作成にあたっては、武道史研究者としての館長山根幸恵の指導助言・協力が大であった。

昭和五十七年度

資料調査報告書 第十集

— 武道関係資料 —

昭和五十八年三月三十日

鳥取県立博物館

〒680 鳥取市東町二丁目一二四
電話 二六一八〇四一
八〇四五